



竹光と女房と

山手樹一郎

光
風
社
版

竹光と女房と

昭和三十八年九月十日 印刷
昭和三十八年九月十五日 発行

定価 三三〇円

著者 山手樹一郎

発行者 豊島清史

印刷者 菅生定祥

発行所 株式会社 光風社

東京都千代田区神田錦町三ノ一四
電話 東京(五七)〇二三八番
振替 東京 五六五二六番

落丁・乱丁は御取替いたします。

目次

下
郎
の
夢

五

櫛

三七

竹
光
と
女
房
と

三

後家の春

七

残暑の道

一七

ばかむこの記

一七

裴
幀

吉
田
善
彦

下
郎
の
夢

上州馬庭村の百姓の伴市助は、おれは侍になってやろうという志を立てて、十八の春高崎藩の久保野弥左衛門方へ下郎奉公に住みこんだ。

「旦那さま、わしはいまに侍になりたいと思うですが、一生懸命奉公したら、なれるでしょうかねえ」

市助は初めて庭先で主人弥左衛門に見得をした時、思いきって聞いてみた。

「ふうむ、お前は侍になりたいのか」

百五十石取りで納戸役をつとめている世なれた弥左衛門は、意外そうな顔をして改めて市助を見おろしていた。

まだ童顔の失せきらぬ市助は、なるほど柄も大きく、牡牛のようにがっしりとして、若さにはち

きれそうな体つきをしている。切れ長な細い目だが、その目の光から見て、土性^{どしよ}つ骨もなかなかしつかりしているようだ。

「へえ、わし侍になりたいです」

「望みは大きく持てというからな。しかし、侍になるには読み書き算盤を一通りおぼえ、武術の修業もしなければならん。土農工商といって、侍は三民の上に立つのだから、それだけに修業もきびしい。しかも、お前には下郎奉公というつとめがあるのだから、その隙^{ひま}を見ての修業なのだ。そういう辛抱ができるかな」

弥左衛門はわざときびしい顔をしていた。

「はい、わしはどんなことでもきつと辛抱するです」

「そうか、お前にその気があるなら、一生懸命にやってみなさい。わしの目から見てもう侍として恥しくないというところまでお前が修業したら、どこかしかるべき侍の家へ養子の口を見つけてつかわしてもよい」

「旦那さま、どうかお願いしますです」

主人の言葉を真^まにうけて、うれしそうに顔を輝かせているこの愚直そうな若者の姿を眺めながら、今どきまだそんな夢のようなことを考えている男があるのかと、弥左衛門は内心ふしぎな気さえし

た。

侍の家に生れた子弟が、侍一通りの修業を日課のようにしててさえ、頭角をあらわすというとは容易ではない。しかも、たとえ少しぐらい頭角をあらわしたからといって、それがすぐ出世のいとぐちになるわけではなし、多くの子弟はそういう世の中の複雑さがわかってくる年ごろになると、たいいてい馬鹿らしくなつてぐれ出すのが普通なのである。

それを下郎奉公の余暇に侍一通りの修業をしようというのだから、弥左衛門は市助の單純さにまづ呆れ、この男もまたその道の容易でないことがわかってくると、途中からぐれ出して小博奕の一つもおぼえ、やがては世間なみの下郎根性にそまつてしまうのがおち、だろうと、人ごとながら妙にあわれな氣さえしてくるのであつた。

しかし、若さにあふれている市助は、いつも明るい顔をしながら、一途な性分と見えて人よりはるかに根氣もよかつた。

久保野家は百五十石取りだから、藩中では中級の侍で、生活は決して楽なほうではなかつた。それでも別に内職をするようなこともなく、下郎一人下女一人使つていられるのは、家族が主人夫婦と、市助より一つ年上の弥一郎という伴と、たった三人ぐらしかからだつた。

が、家族がすくないからといって、下郎の雑用が減るわけではない。朝起きればまず台所の水汲

みからはじまって、門の内外へ箒目ほうめを立て、主人が起きれば洗面の支度からその後始末、下女は一人で台所にかかりつきりだから、寢床のあげおろし、座敷の掃除、それから主人出仕しゅしの送り迎え、こんどは若旦那の供、その間に買物の使い走りや、薪割り、風呂の水汲み、わずかばかりだが裏庭にある菜園の手入れもしなければならない。

それは年二兩二分の給金にありあまるほどの労働で、次から次へと雑用は寝るまで際限がない。いや、こまめに働けば働くほど受けもちの雑用はふえるばかりなのだ。

しかし、市助は生れつき頑丈な体を持っていたので、近所でも久保野はいい下郎をさがしあてたと、評判になるほど全くよく働いた。しかも、その間に少しの暇さえあれば、主人に書いてもらった手本で手ならいもやったし、まだ藩の道場にかよっている弥一郎の剣術の稽古相手にもなった。

その上、いくら口まかせの下郎でも、主人にはねだれない日用品がいるので、台所の前の納屋なやつづきに中間部屋ちゅうかんをもらっている市助は、寝る前に必ず草鞋わらじを作って、それをためておき、城下外れの甚兵衛茶屋へ持って行って買ってもらい、それを小遣にあてていた。

こうして三年の月日が流れ、市助は二十一になった。

人から見れば相かわらずなんの変哲へんてつもない下郎の市助だが、それでも自分ではおれもすこし偉くなったかなと、ひそかにうぬぼれたくなることが一つだけあった。今年になってから若旦那弥一郎

の竹刀が少しも恐くなくなったことである。

稽古熱心の弥一郎はこの秋の試合がすむと、待望の免許をゆるされる組に入っているのだと、このごろひどく張り切っていた。

大体上州という土地は夏は雷が多く、冬は空っ風が吹きまくるので、昔から男も女も気が荒く、博徒などの多いところである。自然若い者の間には武道が盛んで、高崎の近く馬庭には馬庭念流の宗家樋口一門が代々土着しているし、高崎藩からもつい最近組太刀の名手といわれた寺田五郎右衛門宗有などが出ていた。

そういう藩の子弟だから、誰でも一度は道場通いに熱をあげ、我こそ藩中第一の上手になってやろうと一時は夢中になるようだが、そろそろ生意気ざかりになると、さて免許をとってみたいところで、別にこれという出世の道がひらかれているわけではなし、その免許までの修業がまたそう生やさしいものではないとわかってきて、たいていは途中で武芸熱がさめてしまうようである。その中から、ともかくも弥一郎は免許近くまで稽古をつづけてきたのだから、たしかにそれだけの腕にまで上達はしてきているのだ。

無論はじめ市助は若旦那のいいおもちゃだった。散々竹刀で打ちすえられて、こっちはただ夢中で竹刀をふりまわしているだけだったが、しかしそのころからでさえ、

「今日はこれだけにしておこう」

というのは、いつも弥一郎のほうで、子供のころから野良仕事できたえてある市助の体力は、ほとんど疲れというものを知らなかった。

しかも、それだけの運動神経がそなわっていたのだらう、市助は半年一年と夢中で竹刀をふりまわし、道場へ供をしに行くたびに人の稽古を見ているうちに、いつの間にか三本のうち二本までは弥一郎を打ちこめる腕になっていた。

しかし、若旦那は二本まで打ちこまれると、ひどく不機嫌になって、竹刀が殺気立ってくる。だから、市助はなるべく遠慮して打たれるほうへばかりまわっているが、このごろではその弥一郎の竹刀が十本が十本とも、市助の誘うところへきまってくるようになり出したのだ。つまり、弥一郎の竹刀は市助の思いのままに動くのである。

「市助、お前このごろめつきり腕があがったようだな」

弥一郎が時々そう感心する時がある。その度に市助はばれたかなと思って、内心冷やりとするが、「まだだめです。若旦那こそ腕があがりましたね。相沢さまと稽古していても、三本に二本以上だとわたしは見ています」

と、感心してみせると、

「いや、相沢は強い。まあ互角というところだろう」

と、弥一郎は謙遜して、うれしそうな顔をかくしきれない。

相沢又之進は家老の次男坊で、弥一郎とおない年だが、二人ともいい稽古相手で、この秋にはいっしょに免許だろうと、我人^{われひと}ともに見ている。が、市助の目から見ると、このごろでは弥一郎のほうが少し強くなっていて、弥一郎は必ず三本に二本を相沢にゆずっているようだ。

しかし、又之進のほうは弥一郎に飴^{あめ}をなめさせられているとは、少しも気がついていない。それは弥一郎が市助に踊らされていると、少しも気がついていないとおなじだった。

——剣術ではわしはもう侍なみだ。

市助はそれがうれしくてたまらないのである。

そして、手習のほうももう千字文^{せんじもん}に進み、道を歩きながらではあるが、時には論語の講釈を弥一郎にしてもらうことさえあった。

二

その年の三月一杯で、今までいた下女のおたねが暇をとって帰って行った。

おたねは十四の時、市助より半月ばかり早く久保野家へ下女奉公に上がり、まる三年つとめて今

年はもう十七の娘ざかりになっていた。百姓の娘で肌の色こそ小麦色をしているが、目のくりくりとした可愛い面立ちで、口数のすくないよく働く娘だった。

それが去年の夏あたりから、めっきり娘らしい肉づきを増してきて、それはそれなりに目につくような年ごろのきれいさを身につけてきた。

「おたねさん、お前どうしてこのごろそんなにきれいになったんだろうな」

市助はおたねが井戸端で洗濯をしている時、ついそんな冗談口が出てしまったことがある。正直にいえば、浴衣がけで無心に洗濯をしている夏の女のむっちりとした肢体が、ひどくいろっぼく見えて、ふっと市助の男心をひいたからだった。

「知らない、市助さんは——」

ふいを衝かれたおたねはびっくりして耳まで真赤になりながら、いきなり盥の水を手ですくって、こっちへぶっかけてきた。

「おっと、ごかんべんごかんべん」

市助はわざと頭をかかえて、中間部屋へ逃げこんだが、そのころからおたねの自分を見る目が、なんとなく熱ぼったくなってきたのに気がついて、これは困ったことになったぞと当惑した。

こっちは侍になってやろうという大きな野心があるから、ここで下女などと間違いをおこして